

2017年度事業報告

(2017年1月1日～12月31日)

法人名称 NPO 法人 教育支援グループ Ed.ベンチャー

1. 事業成果

Ed.ベンチャーの毎年の総括は、その年の政治・経済・社会・教育を覆う文脈を捉えることから始まる。2016年度は、世界的ポピュリズムの傾向、日本の自衛隊の「駆け付け警護」、そして相模原障がい者施設殺人事件を根拠として「分断」を捉えたが、2017年度は、その「分断」が、さらにその溝を深めているように思えてならない。そして、深まる「分断」の先に感じられるのが「暴力」である。社会を覆い始めている「暴力」的な側面を、2017年は捉えなければならないだろう。

私たちの身近に歩み寄る「暴力」を象徴するものとして、私たちの身近でおきた座間市の殺人事件から目をそらすことはできないのだろう。報道から感じ取れるのは、被害者の社会への閉塞感を利用した加害者の「暴力」であり、相模原障がい者施設の殺人事件が絶対的弱者への暴力であったことと比較すると、暴力は相対的弱者をターゲットとするまでに身近になりつつあると言えよう。他方、政治に目を向ければ、審議を避ける国会運営に見られる多数派や権力保持者による「暴力」、「働き方改革」という名のもとで行われる安価な労働力を強要する「暴力」など、こちらは挙げ始めればキリがない。

さて、このような「分断」に続く「暴力」へと進む社会状況に際して、2017年のEd.ベンチャーは、それに抗う活動がどのように展開できたのかということが問われる事になる。この点を評価するならば、「分断」「暴力」への直接的抵抗には至らないものの、抵抗へのバトンは、若者世代へと確実に受け継がれたことを成果として記すことができたみたいと思う。まず、2016年度立ち上げられた、子育て中のママ・パパをターゲットとした「ママ・パパのための学習会」や「外国人の子ども理解のための学習会」、さらには、現地に赴いて学習する「スタディツアーや」は、本年度も新しい展開を見せたが、その勢いは2018年にも引き継がれつつある。同様のことは本年度立ち上げられた「特別支援教育」事業にも言えることである。加えて、それらの活動の企画運営の主体は、Ed.ベンチャー立ち上げ当時から連綿と続く「理論学習会」「授業研究会」も含めて、すべて若手世代に移行している。現場で立ち上がる問題を「個人」の問題ではなく、「社会」の問題として捉える思考を獲得した若手世代が、「分断」「暴力」への抵抗の大きな資源となることは間違いないと思う。

他方、若者世代にバトンを渡しつつある立ち上げ世代は、そこを終わりとしてリタイアするのではなく、困難さを抱える「現場」へ戻りつつあるということも成果として記すことができよう。立ち上げから9年目を迎える学習教室（エステレージャ・ハッピー教室）は、立ち上げ世代が中心になり、単なる学習教室から、親子ともに関わる学習教室、教室の卒業生を育てる教室へと装いを新たに展開している。また、厚木保健福祉事務所の委託事業として始まった愛川の学習支援教室は、糸余曲折ありな

がらも、そこに見いだされる課題から目をそらさない必要を主張するのも立ち上げ世代である。

2017年度に10周年を迎えたEd.ベンチャーは、今年度10周年記念誌の作成にも取り組んだ。それを通して浮かび上がったのは、高校生から80代までを会員とするEd.ベンチャーの世代交代は、交代ではなく、持っているバトンを自身の状況や力量にあわせて持ち替えながら、抵抗の主体として立ち続ける組織として展開してきているといえよう。

2. 事業内容

学校支援事業 ①理論学習会

【2017年事業目標】大和市で働く教員として、学校で出会う子ども達や親が抱える大変さの背景や、学校を取り巻く世の中の状況を知った時、どのように子どもに向き合うべきか、貧困、弱者といった共通テーマのもとに各分野の教育の実践家の話を聞き、現場の課題を捉え実践につなげる力をつけたい。各テーマを深め、「実際、学校現場はどうか、子どもはどうか。」と、現場の事例と引き合わせ、自分なりの解釈をもって自分の学校や子どもについて話せる場として学習会を設定したい。

【事業総括】貧困と教育をテーマに各分野から講師を招き、幅広い視点から教育現場を見つめ直す一年となった。

学級集団のとらえ方や、主体的な学びについて大学講師を招き学んだり、現在の貧困状況の概要を文献講読から学んだりと、基礎的な知識を身に付ける学習会を設定した。

そして、女性の貧困や、思春期の若者の貧困をテーマにした学習会では、弱い立場にある人たちの現実を知り、経済的な貧困のみならず、人間関係における孤立、情報量の少なさ、公的機関とのつながりにくさなど、様々な困難を抱えながら日々を生きる人たちの姿を知った。子ども達の背景にある環境や、保護者の抱える問題と貧困が深く関わっていること、そして今の関わりだけでなく10年後の子ども達の姿を想像し、今私たち教員が考えるべきことは何か、教育活動の中で大切にしなければならないことは何かと、参加者から声が上がるようになった。

また、授業の中でホームレス問題から見える貧困について、現実や自分自身の考えと向き合う子ども達に寄り添う中学校の先生の実践や、生活綴方の実践を通して母親を励まし続け子どもを育てる先生、立場の弱い子どもに焦点を当て集団としての力を育む国際教室の先生、生活環境の厳しい外国人の子どもへの進路選択に寄り添った先生など、目の前の子どもから課題を立ち上げ、実践している先生方からの報告から得たものは大きい。子ども達の先を見据え、一人ひとりに丁寧に関わる先生たちの姿と言葉は力強いものがあり、どんな力を子どもたちにつけたいのか、そのためにどう行動しているのかという具体的な話から、子どもの状況をあらゆる角度から見つめ、関わり方や寄り添い方を学び得ることができた。

各分野の先生方に共通するのは、相手を責めることなく相手と一緒に考え、寄り添い続けるということだった。それは、何ができるかではなく、困難を抱える相手の声に真摯に

耳を傾け、相手に踏み込むことを躊躇しないということでもあった。

参加者の多くが教員であり、クラスの子ども達と関連させながら学ぶことができたようだった。また、多くの教員が学校現場で子どもを通して貧困につながる課題を感じながら日々対応していることが意見交換の中で見えてきた。そして、貧困という軸で教育現場を見つめ直したからこそ、経済的な課題のみならず、ジェンダー、性、暴力、国籍、労働などそれぞれ特有の課題があり、それぞれが絡み合い、『貧困』という言葉で語られることの複雑さを思い知った一年であった。今一度足元を見つめ、教育現場の課題を捉える重要な視点の一つとして、今後もさらに貧困と教育の関係性について整理していくことが必要であり、子ども達が、社会の中で、学校の中で、どんな状態におかれているかを多角的に分析できることで具体的に関わる視点が見えてくると考える。

事業担当者（理事●）	●馬場有希 ●村本綾 (のべ従事者数 18名)
内容・日時・場所・ 参加者数	4月 10日（月）講演「学級づくりの基本～子どもたちをどう捉えるか～」講師：日本女子大学 清水睦美先生 5月 8日（月）講演「子どもの主体的な学びと生活綴方—「学力」支配から自由になる—」講師：和光大学 奥平康照先生 6月 5日（月）講演「子どもが考える授業づくり」 講師：小田原市立白山中学校 柏木修先生 7月 3日（月）講演「女性の貧困から見えること」 講師：首都大学東京 杉田真衣先生 9月 2日（土）講演「母親を励ますことで、子どもを育てる～生活綴方の実践を通して～」講師：埼玉県所沢市立宮前小学校 伊藤久美子先生 10月 2日（月）講演「子どもの貧困～からだ・こころ・性～」 講師：さいたま市生活困窮者学習支援事業代表 金子由美子先生 11月 6日（月）文献講読 加藤彰彦著『貧困児童～子どもの貧困からの脱出』（創英社/三省堂書店） 11月 19日（日）DVD上映会「ホームレス」と出会う子どもたち 12月 4日（月）教育現場からの報告「困難を抱える子どもたちへの実践」報告者：小中学校教員 (のべ参加者数 103名)
収入金額	43,500円（参加費）
支出金額	60,718円（諸謝金 44,548円、印刷製本費 3,520円、消耗品費 4,000円、賃借料 8,650円、）

学校支援事業 ②授業研究会〈労働教育〉

【2017年事業目標】小学校段階での労働教育の授業を検討する。

【事業総括】昨年度授業実践を行った際に、労働状況や社会背景の実態と子どもたちの感覚にずれを感じた。そのため本年度は、子どもたちを取り巻く社会実態を知るために、現代社会に潜む「貧困」をテーマにした授業を行うことで、現実を想定した困り感をもとに、

疑問や課題に迫れるのではないかと考え、授業案づくりを進めた。

1. つけたい力と労働教育における目標の作成

まず、私たちは労働教育が必要である理由に立ち返った。それは、貧困の連鎖を断ち切るためにある。そのためには、自分の現状や社会に対して問題意識を持ったり、理不尽な場面に立ち向かうことができたりする力や知識が必要なのではないかと考えた。それが「社会的自立に向けた力」である。労働教育の前提にあるこの「力」にはどういうものがあるのかを考え、まとめた。さらに、学校現場で学習を行う場合には学年ごとの成長段階を考えた内容を扱うので、それに伴い、つけたい力や目標においても大まかに段階があつたほうが考えやすいのではないかと思い、低・中・高学年に段階を分けて、文言を変えた。

2. 指導要領対比表

6月22日のパネルディスカッションの中で、小学校だからこそ、理念や、社会問題など、いろいろな視点から授業が行えるのではないか、という意見が出た。それを受け、労働に関して、もしくはそれに付随する授業ができそうな内容を、小学校の指導要領の中から取り上げた。そうすると、教科でいうと「道徳」「社会」「生活」でいくつか授業が行えそうな内容を見つけた。その中から「社会」を取り上げ、それを中心に授業内容を考えていった。指導要領を中心とし、教科書を参考に主に3～6年の社会科の内容を通して行える労働教育の内容を考えた。

3. カリキュラムづくり

カリキュラムにあたっては、「仕事の種類・働く人の実態・自分との関わり」などといった低学年向きの学習内容から「教科書では描かれない仕事の裏側」や「働く人が置かれている状況」「労働の男女差・外国人の働き方」などにも目を向けるような内容を考えた。それぞれの視点が、問題解決の視点につながることを期待している。労働に付随する学習としても「労働者を取り巻く環境」や「非正規雇用の問題」など、貧困の実態につながる内容も組み込んだ。

さらに、年間を通して、労働教育を念頭に置いた授業を行うことで、単発で行うよりも継続的に社会の矛盾や、差別などの問題点に触れ、社会の事象について疑問を持てるような子を育てることとともに、指導者側も授業の先にある「つけたい力」を意識することで、今自分が置かれている状況と比較して考えられるようになるのではないかと考えた。

今年度はカリキュラムづくりを進めていく中で、授業案を検討することにとどまってしまったため、今年度予定していた授業実践をすることができなかった。年間を通した授業展開の中でも、労働教育としての授業実践をどの単元・目標をおいて行うのかを設定し、授業実践として来年度に提案し実践していく。

事業担当者(理事●)	●下新原なつみ ●三澤律子 ●村本綾 ○渡邊巧
内容・日時・場所・ 参加者数	日時：原則木曜日開催 19:00～21:00 5月25日 富士見文化会館 講演会「なぜ、労働教育が必要か」 講師：一橋大学大学院社会学研究科フェアレイバー研究教育センター 高須裕彦氏 6月22日 富士見文化会館 パネルディスカッション「労働教育の浸透のためには」

	<p>講師：一橋大学大学院社会学研究科フェアレイバー研究教育センター 高須裕彦氏</p> <p>パネラー： 大和市立福田小学校 三澤律子氏 大和市立つきみ野中学校 村本綾氏 神奈川県立舞岡高等学校 中山拓憲氏 県中央地域連合事務局長 鍛治邦彦氏</p> <p>7月～11月 Ed.ベンチャー事務所 カリキュラム・授業案検討（担当者） 7月2日・8月31日・10月12日・10月19日 11月16日・11月30日 12月14日 大和市文化創造拠点シリウス 授業案検討会 (のべ参加者数 24名)</p>
収入金額	22,500円（参加費）
支出金額	31,498円（諸謝金 22,274円、賃借料 9,224円）

学校支援事業 ③スタディツアーアー

【2017年事業目標】今日的な教育課題や社会状況の現場を実際に訪れることで、日常の課題を広い視野から考えることができるようとする。

【事業総括】今年度は、NPO法人地域家族しんちゃんハウスが大和市で開催する「子ども食堂はぐく」を訪問した。代表の館合みち子氏をお招きしての事前学習会を経て、ツアーでは一緒に食事をとりながら、子ども食堂の様子を見学させていただいた。

子ども食堂では、食の提供だけでなく地域での居場所づくりという側面も求められてきているが、訪問した子ども食堂は、まさにそれを具現化していた。子どもだけでなく、親、食材を提供する人、食事を作る人、レク活動の講師、面倒を見るスタッフなど、様々な年齢、立場の人が集まり、温かく子どもたちを見守っていた。家庭とは別の場所に、子どもたちが安心して集まれる場所があるということは、彼らにとっても大切であるが、それが、彼らの家族も支えることになっていると感じた。一方で、子ども食堂が生まれた背景には、現代の日本の経済状況が、遅くまで働かなければならないなど、親たちの働き方に影響を与えていていることを忘れてはならない。

食事をしているか、いないかだけでなく、何を、どこで、誰と、いつ、どのように食べているのかということが、子どもたちにとって大事であるということが、食事を囲む子どもたちの笑顔から実感した。このことは、参加者の感想にも多く書かれており、子どもたちを捉える視点の一つとして、「食」の視点を確認し、それを深めることを共有できた。

事業担当者（理事●）	●池田喬 (のべ従事者数 6名)
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>事前学習会 9月21日（木）19:30～21:00 講師：館合みち子氏 (NPO法人地域家族しんちゃんハウス代表) 大和市文化創造拠点シリウス603号室</p> <p>ツアー 10月5日（木）、12日（木）、26日（木）</p>

	11月2日（木） 17：30～19：00 NPO法人地域家族しんちゃんハウス「子ども食堂はぐく」 事後学習会 11月9日（木） 19：30～21：00 大和市文化創造拠点シリウス603号室 (のべ参加者数 23名)
収入金額	6,000円（参加費）
支出金額	1,000円（賃借料 1,000円）

学校支援事業 ④産休・育休・働くママ・パパのための学習会

【2017年事業目標】

- ・時間帯や保育体制を整えることで、産休・育休中の母親でも学習がしやすい場所を提供する。
- ・第一部では、現場から離れている母親に向けて、教育に関する問題を取り上げ、考える機会をつくる。
- ・第二部では、育児に関する制度や先輩ママの体験談など、復帰への不安を取り除ける情報を提供する。
- ・社会から孤立しやすい母親が、人とのつながりをつくる場所にする。

【事業総括】

今年度2年目を迎えた本学習会は、昨年度よりさらに「つながり」を広げることができた年であった。①職場から離れて不安を感じている母親に社会とのつながりを、②育児をしている母親同士が悩みを共有することで母親とのつながりを、学習会がつなげる場所として機能したように思う。参加者の中には、すでに復帰して働いている人やこれから復帰を控えている人など各校から様々な立場の母親が集まり、情報交換をすることができた。また、今年度から会場として使用しているシリウスの和室の部屋は、子どもたちが安心して遊べるスペースになっており、幼い子ども連れの母親でも学習しやすい環境だと言える。

第一部の学習会では、理論学習会で扱ったテーマの中から、子どもの貧困や外国人児童の実態など、母親にも紹介したいと思うものを選び、伝えてきた。具体的な子どもがイメージできるテーマだと、それぞれの体験に基づいて現状や課題だと感じていることを意見交流でき、学習が深まった。

第二部の茶話会では、育児に関する制度の学習や、先輩ママの体験談などを扱った。昨年度に出た内容を基に、さらに内容が深まるよう、制度については詳しい事務の方に聞き、体験談については復帰して何年か働いている母親に聞いて情報を集めた。今回は都合が合わず、会場には呼べなかつたが、実際に来てもらえるよう手配していきたい。

9月の講演会では、臨床心理カウンセラーの講師の方をお呼びして、子育てとの向き合い方についてお話を伺った。「子どもの発達」を知ることで、子育てを俯瞰して見ることができ、その時の子どもの発達段階に合わせて夫婦や地域で連携して関わり、見守ることが大切だということだった。子育てを通して、親も育っていくのだという言葉を聞いて、会場にいた母親や父親は肩の力が抜けてホッとした様子だった。

学習に対して意欲的な母親がより深く学べるように、学習会を充実させることが課題で

ある。そのために、他の事業とも連携して、母親が来やすい日時に合同で学習会を設定するなど、工夫して組み立てていきたい。

事業担当者（理事●）	●清水美希 ○下新原なつみ (のべ従事者数 10名)
内容・日時・場所・参加者数	2月4日（土）10:00～11:30 富士見文化会館 子どもの貧困／育児中の制度 (大人4人、子ども3人) 4月22日（土）10:00～11:30 シリウス オリエンテーション (大人3人、子ども2人) 6月24日（土）10:00～11:30 シリウス 子どもの主体的な学びと生活綴り方／育児中の制度 (大人5人、子ども3人、アルバイト2人) 9月3日（日）10:00～11:30 シリウス 講演会「家族が育つ、家族で育む」 講師：若林ふみ子氏 (大人13人、子ども6人、アルバイト2人) 11月25日（土）14:00～15:30 シリウス 外国人の子ども理解のための学習会／先輩ママの体験談 (大人5人、子ども3人) (のべ参加者数 51名)
収入金額	9,500円（参加費）
支出金額	46,865円（諸謝金11,137円、消耗品費30,324円、賃借料5,404円）

学校支援事業 ⑤外国人の子ども理解のための学習会

【2017年事業目標】学習ボランティア希望者や、学校教員が「大和市の外国人児童、生徒」が抱える問題の理解を深められるような学習会を企画運営する。

【事業総括】

大和市には、数多くの外国にルーツをもつ子どもたちが暮らしている。しかし、来日経緯や家庭の状況、普段子ども達がおかれている環境を知る機会が極めて少ない。そこで、学習ボランティア希望者や、学校教員を対象に夏8月4コマ×2日間（2018年1月4コマ×2日間計16コマを計画）、外国人の子ども達が置かれている状況や課題を理解し、様々な教育現場での学習支援に役立てていくために、学習会を開催した。特に近隣の小・中学校の国際教室にかかわりのある教諭が7名参加した。

今年度の学習会は、小・中学校やその国際教室にいるであろうルーツをもつ子どもたちに焦点を当てた内容となった。それらの内容を研究者、教育委員会指導室や大和市国際化協会、市内の国際教室担当経験者の中学校教諭、当事者団体のすたんどばいみーのスタッフなどがコマの講師となり、多方向から理解できるようにした。また今年度にはこの地域で活動する在日中国人の研究者を講師とし、出身国の違いによる子どもの抱える課題についてより具体的な事例を学ぶ機会となった。今回は多くの講師が、生きづらさを感じていた当時の子ども

たちの残した作文を読むことで、子どもたちが表出しづらい部分を共感できたり、8コマ中3コマがこの地域で生活する外国人の当事者が講師となったことでそれぞれ違うように見えてもそれぞれの外国人の生きづらさが複雑に結びつくように感じ取れたりしていた。

参加者からの感想や振り返りから、「母国語や母国での思い出を忘れちゃいけないと言つてきたことが正しかったと思えた」「今まで関わった子を思い出しながら、あの子は笑顔でいたけれど困っているときもあったのかなと想像しながら聞いていた」「いろいろな子の顔が浮かび上がってその背景にこんなことがあったのかと理解を深めることができた」「教員は外国人の子を目の前にしたときに国籍と日本語能力だけに着目しがちだが、もっと視野を広げて多くのことを知ってほしい」「この先生と関わったことが本当によかったと思ってもらえるような経験が子どもたちにできるようにしたい」「もっと踏み込んだ国際級の子たちの独特の人間形成を考えねばならないと身が引き締まる」など、それぞれのコマが参加者にとって改めて現場に戻ったときに学んだことを活用できるということだけでなく、ルーツを持つ子どもたちと向き合う原動力や資源となつた。

事業担当者(理事●)	●前田拓郎 ●西岡歩	(のべ従事者数 2名)
内容・日時・場所・参加者数	<p>内容 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ①外国人の子どもの生きにくさ ②私が出会った外国人の子どもたち ③大和市国際化協会の活動紹介 ④すたんどばいみーの活動紹介 ⑤外国にルーツを持つ子どもの言語獲得 ⑥アイデンティティ獲得の困難さ ⑦ルーツ別の子どもたちの抱える課題の違い ⑧中国系の子どもたちの抱える課題 ⑨学習を振り返っての討論（まとめ） <p>日時 : 8月9日（23人参加）、10日（16人参加）</p> <p>（のべ参加者数 39名）</p> <p>場所 : 大和市文化創造拠点シリウス</p>	
収入金額	0円	
支出金額	55,326円（諸謝金33,411円、印刷製本費3,630円、通信運搬費9,485円、賃借料8,800円）	

学校支援事業 ⑥特別支援教育のための学習会

【2017年事業目標】「発達障がい」を中心としながらも、「障がい」に対する理解を深められるような研修を企画・運営する。

【事業総括】

今年度、新事業として立ち上げた本事業では、講演会（3回）、スタディツア（べてるの家1回）、文献講読（1回）を開催し、以下の内容を確認するに至った。

- ・発達障がいには、学習障がい、ADHD、自閉症、アスペルガー症候群、広汎性発達障がいと、様々ある。

- ・障がいを抱えている人は、感覚がほかの人よりも敏感であることが多いため、気づかれにくい困難さを抱えていることがある。
- ・障がいの境界線は、とてもあいまいである。
- ・「障害者差別解消法」の目的は、共生社会の実現である。
- ・教育現場では、支援級と通常級の間で、教員の意識の共有がされにくい実態がある。
- ・「べてるの家」で行われている、精神障がいなどがある人同士が、自分の困難さと向き合い、悩みを言葉で表出し、共有する当事者研究という実践がある。
- ・大阪のおおぞら小学校における、学校と地域、障がいの有無などの垣根を超えた学校の実践から包括的な教育の可能性はある。

特に、べてるの家の課題や失敗を打ち明けてメンバー同士で解決策を考えるミーティングや、おおぞら小学校の子ども同士のけんかを、二人だけのものにはせず、クラスや学校全体で関わり、教師だけでなく地域の人とも共有し、寄り添い、解決していく姿に共通していたのは、互いに居心地の良い集団つくりをすることである。「互い」というのは、「障がいがある人」「ない人」の二方向だけではなく、すべての人に向かられるものである。学校現場で考えると、教師の「心がけ」や「声がけ」が、個人を支え、集団を作っていくのである。他方で正しい知識もまた必要である。ただし、気をつけなければならないのは、知識は、集団から個を引き離すためのものではなく、集団の中で、適切な助けが得られるためのものであるべきだということである。

事業担当者 (理事●)	●三澤律子 ●すたんどばいみー(劉麗鳳) ○森尾宙 ○西岡歩 ○清水睦美 (のべ従事者数 11名)
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>4月 28日（金）講演会「障がいを知る」 講師：松風園臨床心理士 海老原裕美氏</p> <p>6月 1日（木）講演会「障害者差別解消法を知る」 講師：横浜法律事務所 弁護士 向川純平氏</p> <p>7月 18日（火）「小・中学校、養護学校の特別支援教育の実態」 講師：大貫俊章先生（大和市立上和田中学校教諭） 武部由里先生（大和市立文ヶ岡小学校教諭） 泉由紀子先生（大和市立文ヶ岡小学校教諭） 寺崎健太郎先生（厚木市立玉川中学校教諭）</p> <p>8月 21・22日スタディツアーハイアーバン「べてるの家」訪問</p> <p>8月 29日（火）「べてるの家」訪問まとめ</p> <p>12月 1日（月）文献講読会『「みんなの学校」が教えてくれたこと～学び合いと育ち合いを見届けた3290日～』 (のべ参加者数 68名)</p>
収入金額	44,000円（参加費）
支出金額	94,509円（諸謝金 22,274円、通信運搬費 7,950円、印刷製本費 940円、旅費交通費 47,516円、消耗品費 3,029円、雑費 8,000円、賃借料 4,800円）

外国人支援事業

⑦子どもの居場所・学習支援教室（エステレージャ・ハッピー教室）

【2017年事業目標】

<小学生教室>

教科学習支援として、宿題の他、国語・算数を中心に、学年ごとに習得すべき内容の教材を使用した学習の支援を行う。就学前～低学年児童に対しては、日本語の語彙や日本語による経験を補うことを目的として体験的な学習を積極的に行う。4年生以降の児童には、上記に加え、学習だけではなく、家庭や学校の話を聞いたり、学年を超えた集団授業などを工夫する。

<中学生教室>

中学生に対しては、普段の学習支援の他、定期テスト対策、高校受験支援を行う。また、必要に応じて定期テスト対策のための学習会を不定期に開催する。

【事業総括】本年度は、4月より教室の体制に変更をした。子どもたちへの対応をよりきめ細かくするために、登録制の導入、学期制の導入、教室開催時間の変更、母語で話ができる時間の確保の4点の変更を行った。

登録制の導入については、現状のスタッフの数で子どもたちに十分に対応するためには、18人程度を上限とすることを予定していたが、指導の継続性を考えて、3月末現在教室を利用している子どもたちを優先的に登録することとした。そのため登録者数が28名と予定数よりも大幅に増えてしまったが、いつも同じ仲間と一緒に学習することができるため、子どもたちが安心して学習に取り組む様子が見られていて、登録制を導入したことは、この点において有効であった。欠席が3回になった場合には家庭訪問等で状況を把握することを予定していたが、電話連絡が中心となり、十分に把握できていないこともあった。

学期制の導入については、学校の3学期制と同じ体制を取り、各学期ごとに保護者会を持ち、登録希望の確認とともに子どもの教室での状況や学校での様子、保護者の希望等について話をする時間を作った。保護者とスタッフが子どもたちの事について話す機会がこれまで保障されていなかったため、保護者の子どもへの願いや思い、エステレージャへの要望等を聞きとることができた。また、保護者同士話ができる場を提供することにつなげることができて良かった。

教室開催時間の変更については、スタッフが教室開始前30分を教材準備とミーティングの時間とし、教室後のミーティングを簡略化する事としたが、教室後のミーティングの簡略化は難しく、十分な時間の確保が必要であると感じた。

母語で話をする時間の確保では、昨年度に引き続き英語教室という形で開催した。小学生と中学生に教室を分け、各1時間ずつ学習の時間とした。小学生教室では、子どもたちが英語の学習を楽しみにしている様子であるが、理解に差があるため、様々な理解の子どもたちが、教室を分けることなく一緒に学習していく指導方法を模索していくことが必要であると感じる。

今年度の新たな試みとして、外国人の高校生・専門学校生4人が有償スタッフとして子どもたちの支援に当たるようになった。ボランティアでスタッフとして参加していた外国人の専門学校生と、3月まで中学生として教室に参加していた高校生たちが、スタッフと

して外国人の子どもたちに先輩として学習支援をしている。子どもたちにとっては自分と同じ外国人として生きる身近な手本となる先輩であり、頼りになる存在となっている。

学習支援の内容については、小学生には宿題の他に国語、算数を中心として学年ごとに習得すべき内容の教材を使用した学習支援を行い、漢字の学習で漢字の成り立ちなどについて集団学習を2回行った。漢字の成り立ちなど興味を持って学習できていた。小学生の学習は算数が主となるが、4年生からの算数の教材が充分に揃っていないことがあるので、今後各学年の教材の充実を図りたい。中学生には、普段の学習支援の他に定期テスト対策や高校受験の支援も行った。普段の支援の中で、定期テストのための学習を少しづつ進めていけるような支援を行う必要がある。

なお、現在登録希望待機者が数名おり、来年度さらに待機者が増えていくことが予想される。登録希望者の要望にこたえるためには、教室を拡大していくことを検討していく必要がある。そのため来年度、座間厚木教室を統合して教室の運営を検討していきたい。

事業担当者（理事●）	●篠原弘美 ●馬場貴司 ○角替弘規 (事業スタッフ) 内藤順子 吉間里依 保坂克洋 ガマラ・ヒロシ 井上哲夫 相模女子大学ボランティアサークル「ミント」 (のべ従事者数 355名)
内容・日時・場所・ 参加者数	〈毎週土曜日〉 10:30～12:30 (3月までは 10:00～12:00) 1/14 21 28 2/4 11 18 3/ 4 11 18 25 4/8 15 22 29 5/13 20 27 6/3 10 17 24 7/1 8 15 22 29 8/5 19 26 9/2 9 16 23 30 10/7 14 21 28 11/4 11 18 25 12/2 9 16 23 〈定期テスト対策～中学生対象〉 18:00～20:00 2/ 12 5/11 9/26 11/17 〈中3受験対策学習会～すたんどばいみー勉強合宿への参加〉 12/23 24 (のべ参加者数 就学前児童 42名 小学生 438名 中学生 148名)
収入金額	280,800円 (県中央労福協共済金 250,000円, 参加費 30,800円)
支出金額	267,722円 (給与手当 161,848円、印刷製本費 1,580円、消耗品費 39,653円、賃借料 46,725円、旅費交通費 6,780円、諸謝金 11,136円)

外国人支援事業

⑧子どもの居場所・学習支援教室（厚木・座間教室）

【2017年事業目標】

小学生に対しては基本的な読み書き・計算の習得を目指す。理科や社会に関しては必要に応じて対応する。

中学生に対しては英語と数学を中心に学力の向上を目指す。定期試験前には他の教科にも対応する。

高校生に対しては卒業あるいは卒業資格取得を目指す。

【事業総括】

今年度は参加者1名、スタッフ1名で教室を運営してきた。

中学卒の参加者は、専門学校進学を希望していたので、当初高等学校卒業程度認定試験の合格を目指して勉強していたが、8月の試験で思うように成果が見られなかつたので、9月に高校に通学するための勉強に方向転換し受験準備を始めた。しかし、12月に再度高等学校卒業程度認定試験に挑戦することになり、予備校で勉強することになった。

そのため当教室は閉鎖し、エステレージャに統合して、今後予想されるエステレージャの事業拡大に尽力することとした。

事業担当者(理事●)	●福島聖子	(のべ従事者数39名)
内容・日時・場所・ 参加者数	日時:7月までは主に木曜日、8月からは月曜日 15時~17時 活動日:1月14、17、21、23、30日/2月7、23日/3月2、9、16、23日/4月6、13、20、27日/5月4、11、18、25日/6月3、10、26日/7月3、10、18、21日/9月11、25日/10月2、9、30日/11月6、13、20、27日/12月4、11、18、28日 場所:アミューあつぎ	(のべ参加者数39名)
収入金額	0円	
支出金額	12,700円(賃借料)	

外国人支援事業 ⑨保証人事業**【2017年事業目標】**

- ・奨学金を希望する外国人学生が、保証人が見つからずに進学をあきらめるということがないよう、事情を確認した上で支援を行う。
- ・保証対象者との定期的な面談の中で、生活状況を把握し、必要に応じてアドバイスを行い、返済が滞ることのないようにする。

【事業総括】

今年度新規対象者はいなかった。年度初め、対象者は3名だったが、1名は2月に奨学金の返還が終了し、1名は3月に奨学金返還免除となり、4月以降、対象者は1名だけとなつた。この1名は、アルバイトで生計を立てており、未だ不安定な生活状況であるが、毎月の返金は滞ることなく行われている。最近では、真剣に就職を考え始めている。

2月に返還が終了した1名については、10月から正社員になることができたが、まだ安定した生活とは言いがたい上、すたんどばいみー基金の返金も残っているため、月1回の面談は継続して行っている。

対象者との定期的な面談は、単に返金の確認のみならず、対象者の不安を取り除き、生活のリズムを作る一助となっているという点で、意義あるものとなっている。

事業担当者(理事●)	●神戸芳子 ○西岡歩(すたんどばいみー)
内容・日時・場所 ・参加者数	定例報告会 1/28(土) 16:30~19:00 基金の会報告会と共同開催 渋谷中学校開放「下和田の郷」 7/21(金) 19:00~19:30 シリウス

	個別面談 每月1日（原則）計12回 当法人事務所 (のべ参加者数68名)
収入金額	0円
支出金額	1,000円（賃借料）

外国人支援事業 ⑩すたんどばいみー基金

【2017年事業目標】

- ・借り受けから寄付への変更を呼びかける。
- ・寄付を増やす。
- ・返金を遅滞なく受け取る。
- ・すたんどばいみーとの連携事業を行う。

【事業総括】

「すたんどばいみー基金の会」としては最後となる報告会を2017年1月28日（土）16:30-19:00にて行った。参加者22名で、今年も1人ひとりの成長がよくわかる作文発表が行われた。2017年の事業報告会については、連携事業ということで、すたんどばいみーと相談し、2018年1月20日（土）に例年の形の作文発表を行うことになったが、参加者は申込制をとることになった。

すたんどばいみー基金への寄付の依頼については、2017年3月に新しい依頼文書を作成して、HPにアップしたり、会員への配布を行ったりした。その結果、新規寄付として19口を集めめた。

基金の預金から寄付への移行は順調に進んでおり、2016年末の預金242口・寄付518口から2017年末預金159口・寄付571口へと寄付を増やすことができた。

貸与に関しては、新規に、NHさん50口、MEさん112口への貸与を始めた。ただし、MEさんからの申請には満額貸与を受け付けることができなかつたので、今後3年内に優先的に貸与して借換を進めていくことになった。

返金に関しては、NSさんの返金が完了した。GTさん、MEさん、CSさんからの返金は遅滞があつたり、連絡窓口を自己都合で変更するなど見られたが、予定されていた金額が返金された。OGAさんからの返金は、保証人事業との連携で行った。

事業担当者 (理事●)	●すたんどばいみー（チャンソワンナリット）-12月24日まで ○内藤順子 ○清水睦美
内容・日時・場所・ 参加者数	報告会 2017年1月28日（土）渋谷中学校学校開放 16:30-19:00 参加者22名 個別面談 OGA（保証人事業参照） 返金窓口 NS（ナリット）GT、ME、CS（清水）
特別会計	基金730口 援助679口（2017年12月31日末）
収入金額	0円
支出金額	9,730円（印刷製本費4,810円、通信運搬費4,920円）

普及啓発事業 ⑪愛川学習支援 Friends☆Star 教室

【2017年事業目標】 本事業の目的は、愛川町在住のFriends☆Star教室に通う子どもたちの進学・進路に対して、彼らの不安に寄り添い課題解決に向けた支援を行うことを目標とし、子どもたちのニーズに合わせた居場所事業としてのイベント等も行う。

【事業総括】

2016年6月より委託をうけて開始した本事業は、2016年度末に委託元である厚木保健福祉事務所に対して、業務完了報告をした。小学生参加者258名、中学生参加者206名、スタッフ239名を動員した事業となった。これを受け、2017年度も継続委託となった。

2017年度は4月と8月で主たるコーディネーターの変更があり、運営面で不安定な時期はあったが、委託内容を変更することなく、事業を展開することができた。教室に参加する子どもたちの生活状況の不安定さはいよいよはっきりしてきており、その状況に対応するため、スタッフを学年担当制にし、子どもとスタッフの関係を密にする工夫をしてきた。こうした工夫は、直接的な問題解決にはならないものの、子どもたちが学校や家庭を離れたところで、自身を受けとめてもらえる居場所としての役割は、不十分ながらも果たしていると考えられる。

事業担当者(理事●)	●チューブサラーン ○清水睦美 8月以降 ○角替弘規 ○武内敏子
内容・日時・場所・参加者数	教室開催44回(毎週水曜日 原則18:00~21:30 含ミーティング) 居場所事業4回 卒業お祝い会:3月15日 ディキャンプ:7月30日 進路相談会:8月27日 勉強合宿:12月23~24日 厚木保健福祉事務所との連絡協議会3回 3月30日 6月23日 10月13日 (のべ参加者数 小学生215人 中学生259人 スタッフ334人)
収入金額	2,122,589円(2017年1~3月分 543,400円、2017年4~12月分 1,579,189円)
支出金額	2,090,493円(給与手当1,508,307円、印刷製本費3,610円、旅費交通費98,910円、業務委託費186,967円、保険料8,700円、諸謝金201,574円、賃借料800円、通信運搬費360円、消耗品費71,677円、修繕費2,400円、雑費7,188円、)

普及啓発事業 ⑫お母さんのための日本語教室 in 愛川

【2017年事業目標】

- ・簡単な会話や単語を知る
- ・子ども達の学校生活上で必要な言葉を覚える。

【事業総括】 Friends☆Star教室で子ども達を通して日本語教室の開催を連絡したが、人が集まらない状態だった。1回目は教室に来ている子どもの保護者ではなかったが、女性が一人参加した。失業中で職が見つかるまでの間、日本語の勉強をしたいということであったが、一度だけだった。その後教室の子どもの父親が参加し、毎回熱心に通級してい

る。来日30年ということで、日常会話に困らないが経験的に覚えたので正式に学習したいとのことで、目標を文法基本や文章の読解に変更して取り組んだ。参加者が増えないのは、同じ時間帯に地域の企業の日本語教室が開催されていることもあるが、来日の経緯（いざれ帰国するのか）や、ある程度の生活の余裕があるのかなど、勉強するには条件が必要なのではないか。子ども達をみても、家庭生活そのものが成り立っているのか心配な状況が見えてきているのでは、参加人数は増えないだろう。たった一人の参加者だが、Friends ☆Star 教室が続くかぎり、サポートしたいと思う。

事業担当者（理事●）	●武内敏子	(のべ従事者数9名)
内容・日時・場所・ 参加者数	毎月1回 最後の週の水曜日 18:00~20:00 (教室開催時間) 4/26. 5/31. 6/28. 7/26. 8/30. 9/27. 10/25. 11/29. 12/20 場所：中津レディースプラザ	(のべ参加者数7名)
収入金額	0円	
支出金額	6,060円 (賃借料5,600円、印刷製本費460円)	

普及啓発事業 ⑬教育相談

【2017年事業目標】

学校相談、教師相談、保護者相談、外国人当事者活動相談の4部門に分けつつ相談に応じ、それらを通して、社会的に弱い立場にある者に必要な支援のあり方を探っていく。

【事業総括】2017年は、過去の継続相談の3件が終了、もしくは終了予定となり、相談事業の成果が現れた年になった。また、当事者活動の主体や子ども自身からの相談もあり、部門に明確にわけられない相談があることを理解する年となった。また、「若手通訳者育成派遣」という部門もつくり対応し、若手通訳者が少しずつ実績を積みつつある。

【相談1：2015年より継続－2018年春終了予定】2015年度から継続している外国人生徒Mの相談である。2017年度に入り、生徒Mの在籍学校の支援体制に大きな変化があったこと、2015年度の問題発覚以降、すたんどうばいみーの丁寧な個別支援が継続的に行われたことと、大和市青少年相談室の見取りが的確だったことが大きく絡み、夏休み以降、生徒Mは学校へ継続的に通えることができるようになり、進学先も11月末には決定することができた。2年半に及ぶ継続的な支援相談には、丁寧で粘り強い対応が必要であったが、2018年春には相談の終了を予定している。

【相談2：2016年より継続－終了】相談1の支援に附隨する形で、生徒Aへの対応について、すたんどうばいみーや青少年相談室からの問い合わせに対応する形式を整えていたが、体制を整えるほどの相談には至らなかった。生徒Aの進学先も決定したことから、2017年11月にて相談終了としている。

【相談3：2016年より継続－2017年5月終了】厚木保健福祉事務所の委託による本事業は定款変更に伴い、2017年6月より子ども支援事業に移管した。

【相談4】すたんどうばいみーとの協働事業推進にあたり、事業の停滞を防ぐために、事務局会議と連動して月1回の相談を行ったが、10月以降、すたんどうばいみーの意向により未開催となった。

【相談5】2017年11月、エステレージャ・ハッピー教室での対応により浮上した外国人生

徒Tとその家族に関わる相談である。青少年相談室との連携がスムーズに進み、小学校担任、中学校担任ともつながることができ、家族の見守りを継続する体制が整いつつある。

【多言語若手通訳翻訳者派遣事業】1～3月に3回の研修を行い6名を登録した。通訳派遣については、中国語1回、スペイン語2回、タガログ語1回を派遣した。翻訳依頼は、スペイン語4回、タガログ語4回、カンボジア語4回を行った。業務終了後には、担当者によるヒアリングを行い、翻訳・通訳のスキルアップに対応した。

事業担当者(理事●)	●松永雅文 ○神戸芳子 ○清水睦美
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>【相談1】ケース会議（青少相／当該中学校）6回 1/17、3/21、4/25、7/6、8/31、11/29（のべ参加者9人）</p> <p>【相談2】他の相談にあわせて適宜</p> <p>【相談3】子ども支援事業⑪参照</p> <p>【相談4】事務局会議とあわせて計10回</p> <p>【相談5】ケース会議（当該中学校）2回 12/4、12/18（のべ参加者6人）</p> <p>【多言語若手通訳派遣事業】</p> <p>登録日時 4月15日</p> <p>翻訳依頼4回（カンボジア語、スペイン語、タガログ語）のべ12回 通訳派遣3回（中国語、スペイン語、タガログ語）のべ4回</p>
収入金額	0円
支出金額	46,504円（通信運搬費600円、印刷製本費110円、賃借料1,250円、諸謝金44,544円）

普及啓発事業 ⑭学校及び外国人支援に関する普及啓発事業

【2017年事業目標】

今日の社会状況を踏まえて当法人の活動を位置づけ、社会的に弱い立場にある者の支援の重要性を普及・啓発していくこと。

【事業総括】

2016年度に引き続き継続的な普及啓発事業を展開した。主な事業の総括は以下のとおりである。

- (1) 2017年度教育講演会として、文化人類学者・なまけものの教授・明治学院大学国際学部教授の辻信一氏に「シフトダウンへの冒険—『弱さ』の思想と生き方—」をテーマに開催した。
- (2) 2018年度の教育講演会も前回同様に実行委員会形式をとり、テーマ選定及び講師の決定についても綿密な話し合いに基づいて決定した。また、実行委員内部で事前に文献の読み合わせや講師との打ち合わせを行うことで密度の濃い講演会となるよう準備した。
- (3) 当法人設立10周年を迎えたことから、記念事業として10周年記念誌を企画・作成している。
- (4) 広報誌「Ed.ベンだより」も予定どおりNo.17～22の計6号を発行した。

- (5) ホームページは事業内容の進行に合わせ随時更新を続けつつ、より見やすいページを目指して細かな変更を重ねているが、アクセス数は3969 (=11578c-7609c) で、昨年より約200減(昨年度4158)となった。アクセス数が増加するよう魅力的なページ作りに努力したい。
- (6) 2017年度版のパンフレットの作成と配布も滞りなく行えた。
- (7) 他機関・他団体との関係構築として新たに関係を構築したケースはなかった。
- (8) 会員に対する情報提供としては昨年同様メール配信会員と郵送会員に分け、広報誌や事業について迅速な情報提供ができるよう努めた。
- (9) 研究者対応としては愛川学習支援教室「Friends☆Star 教室」をフィールドとした調査研究について対応した。

事業担当者(理事●)	<input checked="" type="radio"/> 角替弘規 <input type="radio"/> 下新原なつみ <input type="radio"/> 前田拓郎 <input type="radio"/> 池田喬 <input type="radio"/> 清水睦美
内容・日時・場所・参加者数	<p>(1) 2017年2月15日 13時30分～16時50分 場所：大和市渋谷学習センター2階多目的ホール 参加者40名（一般33名、学生7名（うち1名高校生）） 実行委員会 馬場(有)（代表）・清水(睦)・角替・前田・チューブ・村本</p> <p>(2) 実行委員会追加：馬場・村本・清水（美）・関野（非会員）</p> <p>(3) 10周年記念誌150部を会員等に配布予定</p> <p>(4) 大和市を中心に教育関係・国際関係団体に配布(1500部／回)</p> <p>(5) 随時（担当者打ち合わせを月2回開催）</p> <p>(6) 2017年度版パンフレット 3月末配布(300部)</p> <p>(7) (8) 適宜</p> <p>(9) 研究調査報告会 2017年3月27日 19:00～21:00</p>
収入金額	164,045円（歳末助け合い分配金100,000円、参加費64,045円）
支出金額	435,608円（印刷製本費169,582円、旅費交通費842円、賃借料1,600円、通信運搬費49,700円、消耗品費54,202円、諸謝金27,842円、修繕費81,000円、業務委託費48,600円、雑費2,240円）

⑯法人の事業円滑実施のための活動

【2017年事業目標】事業円滑実施のために活動し、事業の質を確保すること。

【事業総括】

法人事業の円滑化のために、活動を以下の3部門に分けて、隨時行った。

(1) 総会・報告会・事務所管理等の事務

- ・2017年総会を2017年2月25日11:30～12:30、参加総数70名にて開催した。
- ・定款変更業務を行い、2017年5月24日より新しい定款にもとづく業務を行った。
- ・活動報告会を年内8回開催し、報告・審議を行った。
- ・事務所管理等を含む事務局運営のために年間20回（月2回程度）の事務局会議を行った。
- ・年間計画表を作成し、活動の全体像が把握できるようにした。

<p>(2) 会計事務</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度同様、年3回の会計締日を設定し、予算の執行状況を把握した。 <p>(3) 東日本大震災支援・反原発関連活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年5月に、久しぶりに支援先の万石浦を訪れ、子どもたちの様子を確認し、支援通信を発行した。 ・10周年記念誌への寄稿を万石浦ライオン学校の生徒だった子どもたち2名にも依頼し、当時を振り返ってもらう機会をつくった。 	
事業担当者（理事●）	<p>事務局体制</p> <p>(1) 事務一般：●清水睦美、○武内敏子、○角替弘規、○神戸芳子 ○すたんどばいみー（サラーン）、○浅沼蓉子</p> <p>(2) 会計：○篠原弘美、○神戸芳子、○小西永里子</p> <p>(3) 東日本大震災支援・反原発関連：○清水睦美</p> <p>法人規模・活動報告会：理事21名・総会：正会員106名</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>(1)・事務局会議：月2回（年間22回）、原則金曜日、18:00-22:00 当法人事務所</p> <p>・活動報告会：12回（原則隔月、1・2・12月臨時） 生涯学習センター シリウス</p> <p>・総会 2017年2月25日 参加者70名（うち委任41名） 渋谷学習センター IKOZA</p> <p>(2)・会計確認3回（1月、5月、9月） 当法人事務所</p> <p>・監査 2017年2月12日 当法人事務所</p> <p>(3) 他の事業と連携し隨時 当法人事務所ほか</p>
収入金額	710,511円（会費677,500円、寄付33,000円、利息11円）
支出金額	404,062円（通信運搬費120,167円、消耗品費64,175円、修繕費14,330円、印刷製本費16,050円、旅費交通費10,000円、ガス水道光熱費38,560円、賃借料25,200円、租税公課18,600円、保険料3,570円、諸会費5,000円、雑費88,410円）